

明治期荷風テキストにおける家族の表象 —^{フィクション}虚構の日本の家族像、理想的な西洋家族像

ストラスブール大学
パリ・ディドロ第七大学
太田知美

明治期の荷風の作品において、結婚や家族の問題は中心テーマではないのだが、家族は荷風のテキスト内でたびたび言及され描写されている。本論では1910年前後の小説における父と母、夫と妻、男と女の表象を通じて、荷風作品における愛、結婚、家族像を明らかにしていく。荷風の「家族像」を荷風自身の体験の描写として捉えるのではなく、^{フィクション}虚構の日本の家族像が理想的な西洋家族像の対比項としてテキスト内で構築され、また更に西洋家族の理想像が変容していく過程を分析する。

1. 父母—漢・和の対比

『狐』（『中学世界』1909（明治42）年1月）の語り手「私」は、父親の世界から隔てられ母親と乳母の傍で過ごした自分の幼少時代を思い出す。父親は「内閣を「太政官」大臣を「卿」と称した頃の官吏の一人」で「毎朝役所に出勤」し¹、「維新の革命があつて程もなく、新しい時代に乗じて」水戸の御家人や旗本の「空屋敷三軒ほどの地所を一まとめに買い占め」た²。「馬術」や「大弓^{だいきう}」をし、「碁」をたしなむ人物である³。父親の「お気に入り」は田崎と言う十六七歳の学僕で、「漢語交り」で話す⁴のだが、父親は田崎や他の男の使用人（鳶、車夫、植木屋）と共に屋敷に入り込んだ狐を退治する。

語り手は幼い頃、「三時の茶菓子に、安藤坂の紅谷の最中を食べ」、「母上を相手に、^{まゝごと}飯事の遊び」をし⁵、「紙鳶^{たこ}を上げてばかり遊び暮らし」⁶、また「絵草紙」を読んだりして⁷、乳母や母親の傍で日々を過ごす。絵草紙とは、江戸時代女性や子供用の挿絵入りの通俗的読み物で、草双紙の一般的な呼び名である⁸。十七世紀に発生した草双紙は、各頁の大部分を挿絵が占め、話はほとんど平仮名の文章で書かれている。遊びの場面や絵草紙を繰り広げる場面は、此の短編小説の中で何度も繰り返し登場し、仕事（官吏、役所）、武術（馬術、大弓）や中国文化（碁、漢語）などで表象されている父親の〈男性的〉世界

¹ 『荷風全集』全30巻、岩波書店、1992-1995年、6巻、83頁

² 『荷風全集』6巻、79頁

³ 『荷風全集』6巻、83、87頁

⁴ 『荷風全集』6巻、83、88、92頁

⁵ 『荷風全集』6巻、82頁

⁶ 『荷風全集』6巻、88頁

⁷ 『荷風全集』6巻、83、87、91頁

⁸ 中村幸彦『中村幸彦著述集』中央公論社、1987年、4巻、500頁

と、遊び（飯事、紙鳶）や平仮名の絵本に表象され、語り手が属する母親や乳母の〈女性的〉世界との対立項を形成している。前田愛は父親、田崎や崖上の新邸に代表される「文明開化の実利的・合理的な世界」と母親や崖下の世界に代表される「母なるもの」との間に、「文明と自然、東京空間と江戸空間、男性的な世界と女性的な世界、という一連の対立項」があるとしているが⁹、更に「漢・和」や「仕事・娯楽」の対立項も見て取れると思われる。

中国と日本、仕事と娯楽の対比は『監獄署の裏』（『早稲田文学』1909（明治42）年3月）に描かれる父母によっても表現されている。「私」から「兄閣下」への書簡体の小説内で、書き手「私」は西洋から日本へ帰国してからの日々を語っている。六十になった父親は「家の嫡子と云ふ体面を重ずる為め」、帰国した「私」のために酒宴を催し、「東坡書随大小真行皆斌媚可喜処老媛書と書いた私には読めない掛物を掛けた床の間の前に坐らせ」る¹⁰。「一家の名誉」を重んじる父親は「私の父は厳格なひとです。勤勉な人です。悪を憎む事の激しい人です。」¹¹と語り手「私」に評されるのに対し、厳格さから程遠い存在の母親は「江戸の生まれで大の芝居好き、長唄が上手で、琴もよく弾きました。」¹²と描写される。母と乳母と芝居へ行き「鰻飯の重詰を物珍しく食べた事」、母が買い集めた歌舞伎役者の「錦絵」を眺め、母から「過ぎ去った時代の藝術談を聞いた事」を思い出す「私」は次の様に続ける。

「私は母親といつまでもいつまでも、楽しく面白く華美一ぱいに暮らしたいのです。私は母の為ならば、如何な寒い日にも、竹屋の私を渡つて、江戸名物の桜餅を買つて来ませう。」¹³

ここでも父親の世界と母親の世界は漢文化（漢詩）と和文化（長唄、琴）、仕事と娯楽（芝居、錦絵、桜餅）、厳格さと楽しさなどの一連の対立項によって構築されていると言えよう。

2. 家族

日本の家族、西洋の家族

『あめりか物語』（博文館1908年）所収の『一月一日』（初出『太平洋』1907（明治40）年8月）では、アメリカ在住の登場人物金田が友人に両親の話をする。父親は元大審院の判事で、漢学者、漢詩人、茶人、「書画骨董を初め、刀剣、盆栽、盆石の観賞家」で、「茶人の癖として非常に食物に喧しい人」である。金田の母親が行う書画骨董

⁹ 前田愛『都市空間のなかの文学』筑摩書房、1982年、138-139頁

¹⁰ 「監獄署の裏」『荷風全集』6巻、45頁。返り点や送り仮名の無い白文が引用されている。

¹¹ 『荷風全集』6巻、47頁

¹² 『荷風全集』6巻、46頁

¹³ 『荷風全集』6巻、47頁

や盆栽の手入れの仕方が悪いと叱り、食事に至っては「三度々々必ず食物の小言を云はずに箸を取った事がない」程である¹⁴。幼少の両親の印象を金田はこう語っている。

「私が生れて第一に耳にしたものは、乃ち皴枯れた父の口小言、第一に目にしたものは、何時も襷を外した事のない母の姿で、無邪気な幼心に、父と云ふものは怖いもの、母と云ふものは痛ましいものだと云ふ考えが、何より先に浸渡りました。」¹⁵

やがて中学校へ進んだ金田は「円満な家庭のさまや無邪気な子供の生活を描した英語の読本、其れから当時の雑誌や何やらを読んで行くと愛だとか家庭だとか云ふ文字の多く見られる西洋の思想が、実に激しく私の心を突いた」¹⁶ため、その後は父親の語る「孔子の教だの武士道だの」に反抗し、将来は「父と別れて自分一個の新家庭を造り、母を請じて愉快地に食事をして見やう」と思うようになった、ことを語る。金田が感嘆した西洋の思想はここでは「愛（ラブ）」と「家庭（ホーム）」の二語に表象されている。愛という言葉は明治初期から英語 love の訳語として使われ¹⁷、キリスト教の愛や親子兄弟の愛情、男女の愛情を意味していた¹⁸。また、「家庭」は home の訳語として明治 20 年代（1887-1896）に定着した言葉である¹⁹。明治期総合雑誌（『近事評論』、『六合雑誌』、『国民之友』、『中央公論（反省会雑誌、反省雑誌）』、『太陽』）では「明治 20（1887）年前後をピークとして、家族の団欒や家族員の心的交流に高い価値を付与する新しい家族のあり方 [...] 「家庭（ホーム）」的な家族を理想とする記事が多く現れ」た²⁰。また当時、キリスト者巖本善治を中心とする『女学雑誌』では、「愛」と「家庭」の二語の西洋における意味を、キリスト教的な意味も含めて、日本に導入しようとしていた²¹。

この登場人物金田が心に描く家庭や家族の理想像は、当時のこのような雑誌で読んだ英米家族の肯定的なイメージから作り出され、更にこの理想像は、中国や日本の思想（「孔子の教だの武士道だの」）に影響された自分の家族を批判する為の根拠となっている。金田による日本と西洋の家族描写では、オクシデンタリズムの一側面である西洋を理想化する言説が、オリエントへの否定的な言説によって支えられている。

¹⁴ 『荷風全集』4巻、174頁

¹⁵ 『荷風全集』4巻、175頁

¹⁶ 『荷風全集』4巻、175頁

¹⁷ 『明治のことは辞典』惣郷正明、飛田良文編、東京堂出版、1986年、3頁

¹⁸ 同上

¹⁹ 『日本国語大辞典』小学館、2000-2002年、3巻、833頁

²⁰ 牟田和恵『戦略としての家族』新曜社、1996年 53-57頁

²¹ 「嗚呼真正の愛は必ず先づ相ひ敬するの念を要す。 [...] 男女もしいよ／＼清潔に、いよ／＼高尚にあらんと浴せば、須らく互ひに相敬愛すべし。」（巖本善治「理想の佳人」、『女学雑誌』明治 21 年 4-5 月）

「夫なるものよ、キリストの教会を愛し其為めに己を捨給ひし如く、汝等も婦を愛すべし。」（「楽しき真の家庭」、『女学雑誌』明治 27 年、398 号）

家庭については、香川由紀子「ホームと家庭—明治の語彙に見る近代的家庭像」、『表現研究』2007 年 10 月、57-58 頁参照。愛については、佐伯順子『「色」と「愛」の比較文化史』岩波書店、1998 年、10、14、17 頁

「オクシデンタリズム」言説とは東洋（オリエン）が西洋（オクシデント）を構築して行く動向であるが、これは西洋による虚構のオリエン像の形成である「オリエンタリズム」と補完的な関係にある²²。オリエンタリズムは両義的であり、魅惑的なオリエンを欲望し、同時に野蛮なオリエンを拒絶するという特徴を持っているため²³、オクシデンタリズムはオリエンタリズムの二面を、西洋批判と西洋崇拝によってそれぞれ補完するのである。また、オリエンタリズム言説がオリエン自身によって受容されると、二つの言説（オリエンタリズムとオクシデンタリズム）が相互作用を及ぼし、新たに異種混濁的な表現を生み出すのであるが、これは明治末期の荷風テキストに見受けられる特徴である²⁴。しかしながら、明治期の荷風による家族の表象に関しては、言説の構造は至って簡潔で、西洋崇拝と東洋（日本）拒絶という図式に集約される。

『あめりか物語』所収の別の作品『市俄古の二日』（初出『文藝倶楽部』1905（明治38）年12月）では、アメリカ人の家に招待された語り手「私」が「自分の養育された家庭^{ホーム}の様を回想」する場面がある。

「四書五経で暖い人間自然の血を冷却された父親、女今川²⁵と婦女庭訓²⁶で手足を縛られた母親。音楽や笑声^{だうあく}なぞの起こりやうはない。[...] 其の時の父の顔、^{はいはい} 獰悪な専制的な父の顔、唯諾々盲従して居る悲し気な、無気力な母親の顔、自分は小供心ながら、世に父親ほど憎いものはないと思つたと同時に、母親程不幸なものも有るまいと信じた程である。然し、世は遂に進歩するものであるならば、此の野蛮な儒教時代も早晚過去の夢となり、吾等の新しい時代は遠からず凱歌の声を揚げるであらう。」²⁷

この描写に於いても、「音楽や笑声」の聞こえる理想化された西洋家族と、それに相反する儒教（四書五経、女今川、婦女庭訓）に縛られた日本の家族という対立項の図式が見受けられる。

²² Xiaomei Chen, *Occidentalism*, New York, Oxford University Press, (1995) 2002, p. 2、Norman Bryson, “After ‘Orientalism’” 『近代画説』1993年, Rachael Hutchinson “Occidentalism and Critique of Meiji: the West in the Returnee Stories of Nagai Kafû”, in *Japan Forum*, 13 (2), 2001, 2号, 5頁。オリエンタリズムについては Edward Said, *Orientalism*, 1978, エドワード・サイード『オリエンタリズム』平凡社、1986年参照

²³ ノーマン・ブライソン「フランスのオリエンタリズム絵画における他者」、『美術における他者』晃洋書房、2000年、72頁、81頁

²⁴ この点については、拙論 Tomomi OTA, « *Récits d'Amérique* (1908), *Récits de France* (1909) : images hybrides de l'Occident et de l'Orient chez NAGAI Kafû (1879-1959) », in *L'ailleurs de l'autre. Récits de voyageurs extra-européens*, sous la dir. de J. Weber et C. Le Blanc, Presses Universitaires de Rennes, 2009 を参照していただきたい。

²⁵ 『女今川』は、1687年に『今川状』（今川了俊が弟仲秋に当てた家訓）の形式にならって著された。深谷昌志『増補、良妻賢母主義の教育』、1981年、黎明書房、20-28頁、小山静子『良妻賢母という規範』勁草書房、1991年、14-24頁

²⁶ 庭訓とは、家庭内の教育や、親が子に与える教訓を指し、『庭訓往来』という教科書は往復書簡の形式で室町時代に書かれ、江戸時代に初頭教科書として流布した。『日本古典文学大辞典』岩波書店、1983-1985年、4巻、343-344頁

²⁷ 『荷風全集』4巻、204頁

家族関係〈血縁〉の重荷

短編集『ふらんす物語』（1909（明治42）年、博文館）とそれ以降の作品では、日本の家族関係〈血縁〉への嫌悪感があからさまに表現されている。『ふらんす物語』に所収された『砂漠』では、日本へ帰国途中にある語り手「私」が、自分の家族と祖国に対する反感を吐露する場面がある。

「自分を作った親、自分を産み付けた郷土なるものが、押へ難い程、憎く^{いと}厭しく感じられて来た。[...] 親は、自分には何等の相談もせず、勝手に自分を作った。日本は、自分が其の国体、習慣、何も知らぬ先に、自分の承認を待たずして自分をば日本人にして仕舞った。自分は何の酔興で、親に対し、国土に対して、無理無体な其の義務を負ふべき寛大を持つ必要があらう。自分の影は自分の影であるが故に、自分は此れを愛する。自分の親、自分の国土、あなんと云ふ残忍な敵であらう。」²⁸

語り手は、生物学的関係があるからというだけで、両親へ自分が縛り付けられることが我慢できない。自分の自由意志に反して、愛情や優しさの欠如した家族に対する孝行の念が強要される事は受け入れられないのである。

血縁は様々な語り手や登場人物によって重荷と判断されている²⁹。『監獄署の裏』の語り手（手紙の書き手）「私」は、父親とは数年音信不通になっていたが、外国から神戸へ船で帰国したところ、心配した父親が迎えに差し向けた弟を見つけたときの気持ちを次のように記している。

「私は覚え、顔を隠したいほど恐縮しました、同時に私はもう、親の慈愛には飽々^{あきあき}したやうな心持もしました。親は何故不孝な其の児を打捨て、仕舞はないのでせう。児は何故親に対する感謝の念に迫められるのでせう。[...] あゝ人間が血族の関係ほど重苦しく不快極りなきものは無い。[...] 親兄弟、こればかりは先天的に、どんな事をしても断ち得ないものです。断ち得たにしても、堪えがたい良心の苦痛が残ります。実に因果です。フアタリテーです。」³⁰

父親が息子の帰国を祝って酒宴を催すと、「たとへ事情は何であつても表向きは、家の嫡子と云ふ体面を重ずる為め」³¹だと評する。血縁は負担であるだけでなく偽善的であると語り手「私」は感じるのである。

明治民法

この血縁（または「血統のイデオロギー」³²と呼べるもの）を制度面から支えているのは1898年の明治民法である。明治民法の「家」制度において、「法的家族像である

²⁸ 『荷風全集』5巻、293-294頁

²⁹ 作中人物や語り手の外に、作者永井荷風も、米仏滞在後の帰朝当時「長男に要請される〈責任の体系〉」を負担に感じていた事は磯田光一が指摘している。『永井荷風』1979年、67頁

³⁰ 『荷風全集』6巻、44-45頁

³¹ 『荷風全集』6巻、45頁

「家」は「過去（祖先）から現在そして未来（子孫）へと、一定の血縁者（特に父の血統）によって、祖孫連綿と [...] 超代的に承継されるべきもの」とされている³³。

血縁への嫌悪感は、それを支える制度への嫌悪感をも生み出す。『悪感』（『秀才文壇』1909（明治42）年1月、『ふらんす物語』に所収）の語り手「私」は日本へ帰国する船上で、「ロシヤに勝った明治の文明国」において憎むべき物を列挙するが、その中にも「家」制度が含まれている。

「巡查、教師、軍人、管理、日比谷の煉瓦造、西郷隆盛、楠正成の銅像、人道を種に金をゆすつて歩く新聞紙、何々す可らずづくめの表札、掲示、規則、区役所、戸籍、戸主、実印、[...] — 昔から日本帝国に対して抱いて居た悪感情、一時欧米の天地で忘れるともなく忘れて居た悪感情が、過ぎた夜の悪夢を思い出すやうに、むらむら湧返つて来た。」³⁴

1898年の明治民法では、「家」は「家」の長である「戸主」によって統轄され、また「戸籍」は「家」を単位に編製され、戸主およびその家族が記載される。「戸主」という用語は8世紀の律令制で、「戸の長。戸口に対する納税の責任を負った家長」を差す言葉として使われた後、1898年の明治民法732条で「家の統率者、支配者 [...] 家長」を示す語として再び使用される名称である³⁵。また、「実印」も1890（明治23）年の民事訴訟法で使用されている用語である³⁶。

語り手「私」が嫌悪の対象を列挙する際に、「家長」ではなく「戸主」などの明治時代の法律用語を使用するのは恣意的とはいえないだろう。人生のあらゆる領域に浸透してくる規則や法律に支配されることに対するの困惑やいらだちが、これらの法律用語を語り手に選ばせているのではないか。情緒的つながりでもあるはずの家族を法的システムに統轄し、制度化する明治民法の「家」への「悪感」がそこには表現されているように思われる。

3. 恋愛・結婚

日本人女性、西洋人女性

日本と西洋の対比は女性の描写にも現れる。『あめりか物語』所収の『市俄古の二日』にも見られる。語り手「私」はアメリカ人女性が自分の婚約者について「少しも感情を抑へない」で話す姿に心動かされる場面である。

「自由の国に生まれた人よ、と羨まざるを得なかつた。^{こゝろみ} 試に論語を手にする日本の学者をして論ぜしめたら^{どう}如何であらう。彼女は、はしたないものであらう、色

³² 高橋修「秘密の中心としての〈血統〉—『己が罪』『乳姉妹』」、『国文学』1997年10月、30頁

³³ 井戸田博文『家族の法と歴史』、世界思想社1993年、14頁

³⁴ 『荷風全集』5巻、298頁

³⁵ 『日本国語大辞典』、前掲書、5巻、762頁

³⁶ 民事訴訟法、五七〇条・九参照。『日本国語大辞典』、前掲書、6巻、817頁

情狂者であらう、然し、自由の国には愛の福音より外には、人間自然の情に悖つた面倒な教義は存在して居ないのである。」³⁷

語り手に理想化された西洋とは反対に、儒教道徳に染まった日本は感情や情熱を妨害するものと見られている。

同様の構造は、『冷笑』（『朝日新聞』1909（明治42）年12月13日-1910年2月28日）にも繰り返し現れる。小山清は銀行頭取で、彼の妻は「父親が無一文で放浪していた時代の恩人の娘」である。彼女は病身で「子供が出来ない上に、器量も極悪いし [...] 教育とてもない」ことを「恥じて [...] 身を卑下して、唯々まめまめしく夫の身のまはりの事を下女も同様に立ち働いて満足している」³⁸女として描かれている。妻の「この消極的の満足、女の謙遜、覚悟が清に取つては却て忍び得ない程辛い」³⁹のであるが、それは清が「笑声をば自分の妻の口から聞きたいと渴望し」ており、また「女権論者」だからである⁴⁰。

「清は英吉利の婦人が選挙権を得やうとする運動にも同情する位の女権論者である。米国の婦人が帆船の競争をしたり、野球の試合をするのを見ても決して驚かない。男のやる事なら女もやつて構はない。従来^{なにゆゑ}の道徳は何故男子の貞操に寛大であつて、女子の貞操に厳酷であるかを怪しむ一人である。」⁴¹

『冷笑』でも、日本人女性の服従、謙遜、受け身の態度、そして淑徳や貞操は否定的に捉えられ、西洋人女性の活動的で快活な面に対峙されている。

『市俄古の二日』にあるように恋愛感情や情熱を外に表すことは儒教の教えによれば「はしたない」ことであるとされる。このような恋愛に異議を唱えるような言説が、『悪感』の語り手「私」の嫌悪の対象となるのである。日本へ帰国する船の上にいる語り手は、日本人夫婦に出会って次のような感想を漏らす。

「髪の毛の薄い、歯の汚い血の気の失せた細君の顔は、日本と云ふ国では化粧の技術を卑しみ、容貌の評論を許さず、総る恋愛の歓楽を否定し、女は全く、ロシアを征伐すべき未来の兵卒を産むべき、繁栄の機械に過ぎないと云ふ事をば、自分に向つて暗示する如く、合点せしめる如く映ずる。」⁴²

恋愛感情の表現や恋愛の快楽が批判される以上、既婚女性は日本社会にとって人間を再生産する生殖の機械でしかない、とこの語り手は思うのである。

荷風テキストにおける日本の家族像には、「家」制度や、国の帝国主義的意図における子を得る手段としての結婚、過度の「淑徳」の教えや「恋愛の快楽」の否定など、虚構としての家族像に当時の日本の状況が浸透していることが見受けられる。ある意味、法

³⁷ 『荷風全集』4巻、203頁

³⁸ 『荷風全集』7巻、5頁

³⁹ 『荷風全集』7巻、5頁

⁴⁰ 『荷風全集』7巻、5-6頁

⁴¹ 『荷風全集』7巻、5-6頁。

⁴² 『荷風全集』5巻、305頁

の家族像や社会的家族像によって枠組みを規定されただけの空虚な家族が、言葉による虚構（フィクション）の家族像によって際立たされていると言える。そしてその対立項である西洋の恋愛、結婚、家庭の理想を、舞台を日本に移行して描写することは、フィクション内でも起こらないのである。

荷風による愛

荷風のテキスト内で愛情はラブ、愛、恋、恋愛の言葉で表現されている。ルビの付いた「愛」という言葉は、「西洋の思想」に見られる感情として使われ（『一月一日』）、「愛」はキリスト教の愛、または普遍的な愛として使用されている（『市伽古の二日』）。名詞の「愛」「恋」（『歓楽』）と「恋愛」（『悪感』、『歓楽』）は男女間の愛情を示し、動詞の「愛する」と「恋する」も同様である。

男女の恋愛感情が荷風のテキスト内で言及される時、『悪感』^{あらゆ}43での「総る恋愛の歓楽」という表現に見られるように、恋愛は快樂に関係づけられ、性愛、性欲が重要な位置を占めている。『歓楽』（『新小説』1909（明治42）年7月）では「恋愛は無論、智識の力をかりず^{ひとりだち}独立して肉情から発生する事は云ふまでもない事である」⁴⁴とあり、また「肉の底に根を張つてゐない恋は、摘まれた花瓶の花に等しい」⁴⁵と書かれている。そして「愛する」という動詞は精神的と肉体的な意味で用いられている。

「ある夜ある処である藝者が私を愛した、私の方からも愛したのだ。私は不品行の角を以て大学を退校されても、其の当時其れを後悔する^{いとま}暇さへ無かつた程熱中していた。私は其の時始めて、私の身体と私の精神とが外界の刺激に呼び起こされる快感^どに対して、何れ程の感受性を持っているか確かめた。」⁴⁶

こう言った『歓楽』作中の作家は、肉体的愛情と結婚とを相容れないものとして捉えている。

「いか程女に愛されても愛しても、私は家庭の幸福、子孫の繁栄等に思ひ及ぼす事はどうしても出来なかつた。恋は青春のみが知る歓楽である。歓楽は美しい美しい夢である。私は此の美しい夢に、（折角美しいものに、）何等かの目的を負はせるには忍びないやうな気がしてならなかつたのだ。」⁴⁷

この詩人の心に強く響くのは「『結婚は恋の墳墓なり』と云ふ格言」⁴⁸である。肉体的、官能的な恋愛関係が、結婚制度の中で継続すると、この詩人は考えることができないのである。

⁴³ 『荷風全集』5巻、305頁

⁴⁴ 『荷風全集』6巻、9頁

⁴⁵ 『荷風全集』6巻、12頁

⁴⁶ 『荷風全集』6巻、13頁

⁴⁷ 『荷風全集』6巻、13-14頁

⁴⁸ 『荷風全集』6巻、14頁

プラトニック・ラブと恋愛結婚

さて、荷風のテキストにおいて、愛、恋、恋愛などの感情が性的意味合いを色濃く持っているのに対し、明治時代の作家や知識人は「愛」と「恋愛」という言葉を同様に使用してはいなかった。

先に述べた様に、「愛」という言葉は明治初期から英語 love の訳語として使われ、キリスト教の愛や親子兄弟の愛情、男女の愛情を意味していた⁴⁹。しかし男女間の愛情の love の訳は一定せず、「色」「恋」「愛」などの様々な言葉で訳されていたが⁵⁰、キリスト教系『女学雑誌』の巖本善治などの知識人たちによって、「愛」という訳語が優先されるようになった。彼等は「愛」に精神的関係、プラトニック・ラブという狭い意味付与し、「色」には肉情、肉欲という「低俗な」意味を持たせた。そして、親子、兄弟姉妹、友人との愛と、異性間の愛を区別する為、従来の日本語の「恋」に翻訳語「愛」を合体させ、精神的な愛である「恋愛」という表現が出来たと考えられる⁵¹。北村透谷が『厭世詩家と女性』（『女学雑誌』1892（明治25）年5月）で賛美しているのは、この純粋な精神的恋愛である⁵²。

そして、巖本善治等『女学雑誌』のプラトニック・ラブの推進者達は、「愛」に基づく結婚と「愛」に満ちた家庭を提唱した。

恋愛と結婚に関する荷風の言説は、当時の主流な恋愛観、結婚観から逸脱したものである。性欲の欠落したプラトニックな恋愛、そして恋愛結婚が同時代人に賛美される中、荷風テキスト内の恋愛は非常に肉体的、性的である。官能性が重視される荷風の恋愛は、結婚制度という枠に収め難いものであるのかもしれない⁵³。『歓楽』の詩人が言う様に恋愛と結婚は相容れないため、恋愛結婚、そしてそれがもたらす幸福な家庭、というものは、荷風テキストの中に登場することはなかったのである。

結論

荷風の明治末期のテキストにおける家族像、女性像、結婚像において、繰り返し表れる図式は西洋の理想化と、それに相反する日本の批判である。西洋の理想像は、日本の家族における批判すべき点を明るみに出す為の仕掛け・装置として、利用されているとも言える。しかし西洋を賛美する登場人物や語り手は、西洋モデルに基づいた結婚や家族を模倣することはない。

⁴⁹ 『明治のことば辞典』前掲書、3頁

⁵⁰ 坪内逍遙の『当世書生氣質』（1885年）では色、恋、愛、ラブがつかわれている。

⁵¹ 佐伯順子、前掲書、10-18頁。他に、柳父章『翻訳語成立事情』岩波書店、1982年、90-91頁、95-96頁、柳父への批判として、高橋修「「恋愛」以前の恋愛」、『年刊日本の文学』有精堂、1993年、7-9頁、小谷野敦「日本恋愛文化論の陥穽」、『男であることの困難』新曜社、1997年。恋愛という言葉は明治20年代（1887-1896）に定着したと見られている。（『明治のことば辞典』前掲書、602頁、『日本国語大辞典』前掲書、13巻、1090頁）

⁵² 紅野謙介「女子教育と『若菜集』」、『年刊日本の文学』前掲書、29頁

⁵³ 結婚（家庭）、恋愛、性欲は大正時代の「恋愛論」において関連づけて論じられるようになる。（菅野聡美『消費される恋愛論』青弓社、2001年、108-109頁）

またその一方で、荷風テキストの性的恋愛は、西洋思想やキリスト教の影響で主流となった精神的愛、恋愛結婚、幸福な家庭という考え方と、程遠いものになっている。その結果、理想であるはずの西洋像も変容し、元の理想像から逸脱するという現象が起こる。

『見果てぬ夢』の主人公の弟が作った「平和な Puritanisme の家庭」⁵⁴は、西洋的な家族の理想の実現であると言えるはずなのであるが、主人公は弟の家庭を評価しないのである。

「弟の家には暖かい火と明い日光と青々した樹があるであらう。あゝ、然し其れが果して何であらう。彼は画で見る英吉利風の曇つた空の下に声もなく静かに広がる牧場の景色と、熟つた葡萄の葉かげにNymphe[s]の群がFaun[e]に戯れる日のあつた泉のさまとを思ひくらべた。北方の野に移り栄へた教へと、南の海のほとりに其の名残を止める教と何れが誠のものであらう。」⁵⁵

主人公は、北ヨーロッパのピューリタンの文化より、Nymphes や Faune に表象される南欧の肉体的愛のほうを好む。西洋を賞賛する言説は存続するが、アングロサクソンの愛（ラブ）や家庭（ホーム）を熱望することはもはやない。

『冷笑』の登場人物徳井も同じ様な考えを述べている。「同じ西洋の中でも文明は段々北の方へ進んで行くものだから、熱帯は成る程野蛮にちがひ無いのかも知れないが、然し私は熱帯ほど愉快的な生活はないと思ふ」⁵⁶。文明化した生活よりも野蛮なものへ魅力を感じる徳井の様に、ピューリタンの愛（ラブ）に基づく恋愛結婚の結果としての家庭（ホーム）よりも、官能的な性愛の比重が大きくなる。ここには、荷風テキストにおける元の理想的西洋像（オクシデンタリズム）からの隔たりを見てとれると言えよう。

[付記] 本発表は平成 20 年度日本学術振興会外国人特別研究員（欧米短期）事業による研究成果の一部である。

⁵⁴ 『荷風全集』6巻、275頁

⁵⁵ 『荷風全集』6巻、275-276頁

⁵⁶ 『荷風全集』7巻、88頁